

八重山諸島の歴史と文化

— 石垣島と竹富島を中心に —

国際文化学科 今 林 直 樹

はじめに

1. 八重山諸島の地理
 2. 八重山諸島の歴史—一四〇一六世紀を中心に—
 3. 八重山諸島の文化—神話・伝説・民話を中心に—
 4. 八重山研究を支えた人々
- おわりに

註

はじめに

宮古諸島とあわせて「先島」と総称される八重山諸島は、地理的には沖縄の中心城市である那覇から四〇〇km以上も離れて位置しており、そのために沖縄本島とは異なる独自の歴史と、独特の文化を形成してきた。

この「八重山」という呼称については次のような話が残っている。⁽¹⁾

昔、天加那志大明神より人間の住む島を造ってこいと仰せ

付けられた清明加那志と、山を築けと仰せ付けられた大本様の二神が天から降りて来られた。清明様は広い海の中にあつた小さい岩に降りられた。その岩はアガリハパイザーシの岩と言われ、島の中央部の清明御嶽の東方にある。その岩を中心として付近の石や砂利や砂土を盛り上げて作られたのが竹富島である。大本様は大本山を築き、その山の上に住み、清明様は竹富島を造つて島の元に住んだ。その後、大本様からの連絡で、折角島を造るのにそんな小さな島を作つては困る、私と協力してもつと大きな島を造ることにしようとのことで、大石垣島すなわち石垣島が造られた。それから次々と島が造られ、あわせて八つの島が造られたので、これを八重山島と呼ぶようになったと言われている。

今日、「八重山諸島」と呼ばれている島嶼地域は、有人島と無人島をあわせて三〇を超える島々からなっているので、地理的にはこの「八重山創世神話」が説くような「八重山」の原義からは大きくかけ離れてしまっている。上記は竹富島と石垣島の創世神話でもあるが、現在でも八重山諸島には、八重山諸島を構成する島ごとに、上記のようなそれぞれの島の歴史とともに独自の民話や伝説が語り伝えられ、独特の祭祀、芸能が守り続けられている。

本稿では、こうした八重山諸島の持つ独自の歴史や独特の文化について、とくに石垣島と竹富島に焦点を当ててまとめていきたい。

以下、はじめに八重山諸島の地理を概観した後、八重山諸島の歴史、文化についてまとめ、最後に八重山研究を支えた人々についてまとめていく。

1. 八重山諸島の地理²⁾

先述のとおり、八重山諸島は有人島と無人島をあわせて三〇を超える島々から構成される。代表的なものを挙げると、二〇一三年の時点で、有人島には石垣島(石垣市)、竹富島、西表島、小浜島、黒島、新城島(上地と下地)、鳩間島、由布島、波照間島、嘉弥真島(以上、竹富町)、与那国島(与那国町)など、計一二の島々があり、無人島には大地離島、平離島、尖閣諸島(以上、石垣市)、仲御神島、内離島、外離島、赤離島(以上、竹富町)、祖納地崎(与那国町)など、計二〇の島々がある。

上記有人島のうち、最も面積の大きい島が西表島(二八九・二七^{km²})であり、次いで石垣島(二二二・四八^{km²})である。波照間島は日本最南端の島であり、また与那国島は日本最西端の島であるとともに、台湾との距離がわずか一一・一kmという国境の島でもある。

八重山諸島の島々は、その形状から「高島」と「低島」に分類できる。「高島」は標高五〇〇m前後の高い山と川がある島であり、石垣島がその代表である。石垣島には、標高五二五・五mで、沖縄で最高峰の於茂登岳があり、その山麓から宮良湾に流れ込む宮良川がある。「低島」は隆起珊瑚礁からなり、山があっても標高が一〇〇m未満であり、川はない。その

代表が竹富島である。

このような地形の違いは農業の違いとなって現れている。すなわち、水資源が豊富な「高島」では水田稲作が行われているが、それほど水資源が豊富ではない「低島」では畑作のみが行われている。「高島」であれ「低島」であれ、そこに人が居住する以上、農業のためだけではなく、生活のためにも水資源は不可欠である。八重山諸島は「台風銀座」の異名を持ち、毎年六月から一〇月にかけて数個の台風が上陸することから、とかく台風の被害ばかりが強調されがちであるが、その一方で「雨乞いの儀礼」があることからわかるとおり、台風がもたらす雨は「恵みの雨」ともなっている。八重山諸島の気候は亜熱帯海洋性気候であり、例えば、石垣市の年間平均気温は二三〜二四度と暖かい。このような亜熱帯性気候の島に暮らす人々にとってはむしろ干ばつや水不足こそが深刻な問題であった。その事情は現在でも変わっていない。

ここで石垣島と竹富島について触れておこう。

石垣島は八重山諸島の行政、経済、文化の中心地であり、八重山諸島の他の島々への交通の拠点ともなっている。地形的には「高島」であり、島の主要部がほぼ正方形をなしていて、その南部に人口が集中している。主要部の中心に聳えるのが沖縄最高峰の於茂登岳であり、その山麓から宮良川が流れている。主要部の西北部の川平地区と崎枝地区には、通称で川平半島と屋良部半島と呼ばれる小さな半島が伸びており、風光明媚な川平湾、崎枝湾、名倉湾を形成している。主要部の東北には平

久保半島（伊原間以北）が伸びており、その先端には平久保灯台がある。また、石垣島北部には「野底マーペー」（後述）の伝説で知られる野底岳（標高二八二・四m）がある。

竹富島は周囲がわずか九・二kmの「低島」である。人口は三〇〇人程度であるが、島全体が国立公園になっており、「星の砂」の島として知られるとともに、島の至るところに御嶽があり、御嶽や年中行事に関する数多くの祭祀や芸能が残っていることでも知られている。なかでも、種子取祭は竹富島最大の祭祀であり、国の重要無形民俗文化財に指定されている。また、集落は島の中心部に集中しており、その全体が重要伝統的建造物群保存地区となっている。さらに島の特産品であるミンサー織が伝統的工芸品となっているという、小さいながらも全国でも唯一と言つていい珍しい島なのである。

2. 八重山諸島の歴史——一四〜一六世紀を中心に——

八重山諸島が沖縄の歴史に登場してくるのは一四世紀末のことである。琉球王府が編纂した史書である『球陽』には、一三九〇年に宮古と八重山が沖縄本島の中山に初めて入貢したことが記されている⁽³⁾。当時の沖縄本島は中山、山北、山南という三つの勢力に分かれて抗争が展開していた、いわゆる「三山鼎立」と呼ばれる分裂時代にあつた⁽⁴⁾。当時の中山王は察度であつた。この察度に始まる察度王統は、沖縄史における舜天王⁽⁵⁾統、英祖王統⁽⁶⁾に続く三番目の王統であり、一三五〇年、当時、浦添按司であつた察度が、英祖王統五代目の西威から王位を譲

られて成立した⁽⁵⁾。察度は、一三七二年、琉球として初めて明に入貢した⁽⁶⁾でも知られる。宮古と八重山が中山に入貢した理由には、中山が察度のもとで勢力を強めているという政治的背景があつた。

こうして、この一四世紀末頃から八重山諸島は、宮古諸島とともに、沖縄本島を中心とする中山、後の琉球王国の版図に組み込まれていき、第二尚氏王統三代目の尚真の時代に琉球王国の先島支配が確立していく。そして、その直接の契機となつたのが一五〇〇年に石垣島で起こつた「オヤケアカハチの乱」である。ここに、石垣島ではオヤケアカハチ、竹富島では西塘⁽⁷⁾が現れ、八重山の歴史を刻んでいくことになるのである。

(1) 石垣島

「オヤケアカハチの乱」について、『球陽』は次のように記している⁽⁸⁾。

八重山は、洪武年間より以来、毎歳入貢して敢へて絶たず。奈んせん、大浜邑の遠弥計赤蜂保武川、心志驕傲にして、老を欺き幼を侮り、遂に心変を致して謀叛し、両三年間、貢を絶ちて朝せず。

引用文中に「遠弥計赤蜂保武川」とあるのがオヤケアカハチ（以下、アカハチ）のことである⁽⁸⁾。

一五世紀末頃には、八重山諸島は群雄割拠の時代を迎えてい

⑨。石垣島についてみると、大浜地域を拠点に勢力を拡大していったのがアカハチであった。石垣地域を支配していたのが長田大翁主であり、その妹である古乙姥はアカハチの妻となっていた。川平地域には仲間満慶山英極、平久保地域には平久保加那按司が勢力を得ていた。また、西表島では慶来慶田城用緒、波照間島では明宇底獅子嘉殿、そして与那国島ではサンアイ・イソバがそれぞれの島を支配していた。

『球陽』は「オヤケアカハチの乱」を琉球王府に対する謀叛として、アカハチの驕慢にして傲岸不遜な人物像から説明しているが、岩崎卓爾（後述）の著した『ひるぎの一片』に収録された石垣島的美崎御嶽の由来には「力役納税ノ酷、民ノ枉屈ヲ救ハント欲シ、曩キニ琉球王ニ納ムベキ年貢ヲ廢シ料地ヲ奪ヒタリ」とあり、続けて「乱民之ニ披靡シテ氣勢決河ノ如ク、堂々タル勇決他村ニ殊絶シタリ」とあって、アカハチが琉球王府の過酷な統治から島民を救うべく立ち上がり、大浜地域の住民がアカハチを支持したことが語られている。^⑩このように、「オヤケアカハチの乱」の原因については、文献資料や口頭伝承で異なった立場から語られており、史実としてははっきりしていない。しかしながら、当時の八重山の状況を考えると、まず八重山諸島、とりわけ石垣島における勢力争いがあり、そこにそれぞれの勢力が琉球王国とどのような関係を取り結ぶか、すなわち恭順・服属か抵抗・自立かという問題が重なっていたということができよう。なお、後述するように、この乱には宮古島の仲宗根豊見親が深く関わっている。すなわち、『球陽』

には「仲宗根が）赤蜂と和睦せず。赤蜂、将に宮古を攻めんとして二島騒動す」とあり、アカハチが宮古とも勢力争いをしてきたことがうかがわれる。そうした八重山と宮古の関係からアカハチの乱を理解する必要があるということも指摘されている。^⑫

八重山諸島の諸勢力において、アカハチを支持した首長はいなかった。『球陽』によると、石垣地域の長田大翁主や波照間島の明宇底獅子嘉殿はアカハチに従わなかった。長田はアカハチと戦って敗れ、西表島の古見山に逃げた。明宇底はアカハチの派遣した使者によって殺された。^⑬『ひるぎの一片』には、長田に従っていた仲間満慶山がアカハチの襲撃によって殺され、長田が仲間満慶山の死を深く嘆いて「余ガ右手ヲ切断サル」と人に語ったという話が収録されている。^⑭

こうしたアカハチ優勢という戦局を転換させたのが、宮古島の仲宗根豊見親玄雅であった。先述のとおり、仲宗根はアカハチと勢力争いをしており、アカハチ優勢という八重山の状況を看過することはできなかった。仲宗根はこのことを琉球王府に伝え、王府はアカハチの反乱を鎮圧するために士卒を三〇〇〇余人、軍船を大小あわせて四六隻派遣し、仲宗根がそれを先導した。^⑮大里親方を総大将とする王府軍は、アカハチに手こずりながらも、四六隻の軍船を二手に分け、一方は登野城、もう一方は新河（新川）を攻撃してアカハチの勢力を挫いた。^⑯敗色が濃厚となったアカハチについて、『ひるぎの一片』は、アカハチは命運が尽きたとして大浜の海岸に逃れ、さらに追撃する王

府軍を前に「残念ト叫ビカヲ入レ踏ミシ足跡ヲ石面ニ印シ行跡ヲ暗マシタリ」と記している。⁽¹⁷⁾

この乱の後、長田は古見大首里大屋子に任ぜられた。⁽¹⁸⁾長田の妹の古乙姥はアカハチに与したとして処刑され、姉の真乙姥は永良比金という神職を与えられて神人となった。⁽¹⁹⁾宮古の仲宗根はこの戦功により宮古頭職に任ぜられ、次男の真列金豊見親は八重山頭職となった。⁽²⁰⁾

こうして、アカハチの乱以後、琉球王府による先島支配体制が確立していくのである。

(2) 竹富島

次に、西塘についてみていこう。『球陽』は西塘について、次のように記している。⁽²¹⁾

八重山武富島に西塘なる者有り。其の人となりや、賦性俊秀にして器量非凡なり。中山の大里等、其の才の衆に出づるを以て、遂に此の人を帯びて中山に回り到り、即ち西塘をして法司家に供奉せしむ。

引用文中に「大里等」とあるのは、アカハチの叛乱を鎮圧するために琉球王府から総大将として派遣された大里親方のことである。すなわち、『球陽』によれば、西塘はアカハチの乱をきっかけに大里親方にその才を見出され首里に連れてこられた。いわゆる「西塘の首里上り」であるが、『八重山島由来

記』の「国仲御嶽」の由来を説明した箇所には、西塘がアカハチの乱の際に「召し取られ」とあり、その記述にしたがえば西塘は捕虜であったということになって議論が分かれる。⁽²²⁾いずれにしても、西塘は、それ以後、二五年間首里に滞在した後、竹富島に戻ったとされる。その間に西塘が行った最大の業績が、現在、世界遺産になっている首里城の園比屋武御嶽石門の建造である。西塘はこの園比屋武御嶽石門の完成を機に、帰郷を願って許され、一五二四年、武富大首里大屋子に任ぜられて竹富島に帰郷した。なお、『球陽』によれば、西塘は園比屋武御嶽石門を建てるにあたり、これで故郷の竹富島に帰ることができたならばこの御嶽の神を竹富島に供養すると祈ったと言われ、帰郷後、西塘は竹富島に国仲御嶽を建て、園比屋武御嶽の神を祭った。⁽²³⁾

先述のとおり、アカハチの乱の後、八重山諸島は宮古の仲宗根豊見親の統治下に入ったかに見えたが、その後、八重山頭職であった次男の真列金豊見親がその暴政のために民衆によって王府に訴えられて更迭された上、宮古に戻された。⁽²⁴⁾また、仲宗根亡き後、宮古頭職を継いだ長男の中屋金盛豊見親であったが、これもその悪政が王府の知るところとなって罰せられようとしたところをその前に病没した。⁽²⁵⁾その後、王府は満挽与人を派遣して八重山統治にあたらせていたが、一五二四年、西塘は満挽与人に代わって武富大首里大屋子として八重山を統治することとなったのである。⁽²⁶⁾

西塘は、八重山統治の政庁として竹富島の浦皆治原に蔵元を

建設したが、一五四二年、それを石垣島に移している。『球陽』によれば、八重山諸島の首長たちは竹富島に渡って法令に従っていたが、「武富島の地狭く人少く、往還未だ便ならざる」ために蔵元を石垣島に移したのであった。⁽²⁷⁾その後、西塘は首里城の城壁工事に携わって屏風型の城壁を築き、伝説によれば一五五〇年に亡くなった。

西塘については、園比屋武御嶽石門の建造や首里城の城壁工事にみられるように、卓抜した土木技術、石工技術を持っていたことが高く評価されている。それに加えて、鉄と鍛冶という点から西塘を評価したのが上勢頭亨（後述）であった。すなわち、上勢頭によれば、西塘は竹富島帰郷後、蔵元を建設するとともに、その敷地内に「火の神」を祭り、蔵元の向かいに鍛冶屋を建設した。⁽²⁸⁾上勢頭は、「優秀な石工技術者としての西塘が、ことのほか鍛冶神に対して畏敬の念をもっていたとしてもけだし当然であろう。八重山統治の責任者となるや王府には鉄の供給を要請し、農具の作製配布、農業の改善指導を行い増産をはかった。また、日時計を設置し、時報太鼓を設けて島民に時刻を知らせるなど、その施策は斬新かつ適切であった」と指摘している。⁽²⁹⁾

アカハチが英雄か逆賊かで評価が分かれるのに反して、西塘については優れた人物として一定の評価が定まっており、今日でも島民によってその徳が慕われている。竹富島の出身である狩俣恵一は「この西塘という人物は、竹富島の人々にとつては最大の英雄で、私たちは子供のころ『西塘様のように立派にな

りなさい」と、よく言われました」と回顧している。⁽³⁰⁾

竹富島には西塘を祭った西塘御嶽があるが、それは西塘の墓を御嶽として祭ったものである。また、西塘は現在でも島民の信仰を集めており、毎年、旧暦六月の最初の「みづのえ」の日を祭日として定め、西塘に五穀豊穡の感謝を捧げるといふ西塘大祭が開かれている。この西塘大祭は、一八四六年に始まったとされる。⁽³¹⁾

3. 八重山諸島の文化―神話・伝説・民話を中心に―

本章では石垣島と竹富島に残る神話や伝説、民話について紹介していきたい。

(1) 石垣島

石垣島に残る伝説として有名なのは「野底マーペー」である。「石化伝説」という点から「野底マーペー」についてまとめた高木健は三人の話者から「野底マーペー」の話を採集しているが、その一つを紹介して、まずその内容を確認しておきたい。⁽³²⁾

むかし黒島にマーペーという女がいました。カニムイという男とマーペーは非常に愛しあっていました。黒島は土地は狭く人口が多いので、石垣と西表は広く未開地が多いのでそこにわけようということになりました。

そこでマーペーとカニムイは、私達は愛しあっている仲な

ので一緒に住めるようにと黒島の組頭にお願ひしました。

黒島の組頭は首里の役人に伺いをたてました。しかし、それはできないとマーペーは野底に連れて行かれました。

野底では田や畑を作つて暮らしていたが、マーペーはカニムイの事が忘れられません。

未開の土地ですのでマーペーは健康を害しやせていきました。お盆がやつて来て盆踊りのとき、役人のすきをみてマーペーは野底岳に登つて行つたそうです。

遠くカニムイの住む島の方を見ながら、そのまま帰つて来なかつたそうです。村の人々はマーペーが帰つて来ないので心配して村中のあちこちをさがしましたがみつからない。すると村の一人が実は野底岳の頂上の方で、女の泣き声を聞いたというので行つてみると、於茂登山にかくれて見ることでできない野底岳の頂上でひざまづいたまま石になつていたという。

だから野底岳は野底マーペーという。今から二百五十年前の話です。

まず、この「野底マーペー」伝説が一八世紀前半に起こつた黒島と石垣島に関わる史実を基にしているということを確認しておこう。『球陽』には次のように記されている。⁽³³⁾

八重山野底村を創建して黒島の民人を分移す。

八重山黒島は、本島を離るること海路五里の外に在り。田

地甚だ狭く、人民増繁し、飲食堪へ難し。川平村属地に一曠野有り。名づけて野底と叫ぶ。泉甘く土肥え、宜しく五穀を種うべし。黒島の民人、往來には舟を用ひ、田を耕し地を鋤き、以て労苦を為す。是れに由りて、在番官・酋長呈請して、彼の島民人四百余名を分けて、此に移居せしむ。乃ち之れを叫んで野底村と曰ふ。因りて与人一人・目指一人を設けて総理せしむ。

この石垣島の野底村建設に伴う黒島からの島民の移住は、第二尚氏王統一三代目の尚敬の時代、一七三二年に行われた。當時の三司官の一人が有名な蔡温である。黒島から石垣島に移住したのは黒島の宮里村の人々であつたとされるが、それが「道切り」と呼ばれる強制移住政策として遂行されたことがカニムイとマーペーの悲劇を生んだのであつた。

そして、この哀話を歌にしたのが黒島の民謡「ついでら節」である。この「ついでら節」について、喜舎場永珣は「移民事業の裏面にある実に堪えない悲哀なロマンスを歌つた悲曲」であるとし、そのメロディは「聞く者をして胸をえぐられる思いをさせるもの」であると記している。⁽³⁴⁾ また、牧野清は「当時強制移住させられた人々が、本意ながら泣く泣くと、役人の命令に服従せしめられて寄人となり、島を後に別れていったうらみつらみの気持が歌いこまれ、今に歌いつがれている」と記している。⁽³⁵⁾ 喜舎場の言うように、「孤島苦をしたたかに嘗めつくしていた」⁽³⁶⁾ 黒島の人々にとって、島の窮状を

打開するためとはいえ、「道切り」による強制移住は黒島の人々の心にまさに「孤島苦のつらい記憶」として残った。「ついでに節」はそうした島民の気持ちを歌い上げたものであった。

「野底マーペー」伝説に語られたカニムイとマーペーはそうした島民の思いが作り上げたものであつたであろう。カニムイとマーペーは個人の男女ではなく、カニムイは黒島に残つた人々の象徴として、マーペーは石垣島に渡つた人々の象徴であつたと読むこともできるかもしれない。なお、高木健は石化したマーペーを「抵抗の表現」であるとし、「道切り政策や強制移住に対する、ささやかな抵抗をマーペー伝説を通して表現したかつてではなからうか」として、「野底マーペー」伝説とは「八重山の当時の人々の願望や情の伝説である」と記している。⁽³⁷⁾

(2) 竹富島

竹富島は御嶽の島である。上勢頭亨の著した『竹富島誌 民話・民俗篇』には二八もの御嶽が記されており、島の面積が五・四二km²であることを考えると、竹富島は文字通り「御嶽の島」と言つてよい。そこで、本節では竹富島に残る御嶽のうち伝統的な信仰の対象となつている「ムーヤマ」（六山）と呼ばれる花城、波座間、幸本（小波本）、仲筋、波利若、久間原の6つの御嶽に関する神話を紹介することにする。なお、取り上げるのは上勢頭の『竹富島誌』に収録された「六酋長の土地と

海の配分の伝説⁽³⁸⁾」であるが、便宜上、冒頭に続けて一部加筆し、それぞれの御嶽ごと①～⑥に分けて紹介していきたい。

昔、竹富島には六ヶ村の酋長がいた。その酋長たちは、屋久島、久米島、徳の島、沖繩本島から竹富島へ渡来した。島は小さい上に、土地は狭くして生活に不便であつたため、六人の酋長はそれぞれの領地について協議した。

①花城御嶽（酋長は他金殿、沖繩から渡来）

花城村の酋長は、少しの土地を六つに分けることは無理と思ひ、土地をもらうよりは広い海を多く分けてくれ、と真つ先に願ひ出て、当方から南方にわたる卯辰巳午の四ヶ所をもらひ、大きな海の所有者になつた。

②波座間御嶽（酋長は根原金殿、屋久島から渡来）

波座間村の酋長は耕地面を良い土地から多くと言つて、波座間村を中心に、美崎付近を自分のものに分けてもらひ、その地で粟作につとめた。それで粟の主として尊敬されるようになった。かわりに海としては島の子の方向にある「ヒラソイ」「東ヌソイ」「西ヌソイ」という、三つの大岩を分けてもらった。

③幸本御嶽（酋長は小波本節瓦殿、久米島から渡来）

幸本村の酋長は、波座間王と同様、良い土地を多く取ることを望んだ。「フウジャヌクミ」を中心として西方へ耕地を分けてもらひ、大豆、小豆、赤豆、下大豆等の豆類の研究を

重ねたので、豆の主として尊敬された。そして、海は西の方向の一部をもらって生活した。

④ 仲筋御嶽（酋長は新志花重成殿、沖繩から渡来）

仲筋村の酋長は、竹富島の中央を選び、アラ道から、ンブル、仲筋フウヤシキまでの耕地をもらいうけ、麦作を研究したので、麦の主として尊敬された。海は戌亥の方向を二部自分の海としてもらいうけた。

⑤ 波利若御嶽（酋長は塩川殿、徳之島から渡来）

波利若の酋長は、やさしい欲のない方で、五名の選び残りでよいとのことから、美崎原にある新里村の土地の一角をもらい、海は寅の方向の一部をうけて、ハイヤビーと名づけた。そして、自分は六名の内一番後輩である、先輩たちの諸作物に一番大切な天の恵みである雨を祈り、島の豊作を祈念する、ということから雨の主になった。

⑥ 久間原御嶽（酋長は久間原発金殿、沖繩から渡来）

久間原の酋長は、良い土地より悪い石原を多く持ち、その土地に植林をして人民の幸福をはかることが望みだった。そのため石の多い野原を取り、ヒシャル山、ヘーマジツタイ、クムクシマフ、カイジを所有地にし、石原に木を植え、竹富島の山林の主となって、人民から山の神として尊敬された。また海の方は、未申にある「ヒサラピーナノウーパー」を自分のものとした。

六人の酋長は、自分の担当した職を神司に告げたので、竹

富島の六人の神司はその由来から、土地や海を祝詞に唱え、麦、粟、豆、山、海、雨、この六つに分かれた主の神として六つの御嶽を創立したと言うことである。

以上が、「六酋長の土地と海の配分の伝説」である。この伝説にしたがって、花城御嶽は「海の神」を祭り、以下、波座間御嶽は「粟の神」、幸本（小波本）御嶽は「豆の神」、仲筋御嶽は「麦の神」、波利若御嶽は「雨の神」、久間原御嶽は「山林の神」をそれぞれ祭っている。この伝説は竹富島の主として農業に関わる伝説であるが、先述のとおり、竹富島は「低島」の代表であり、高い山がなく川もない。そうしたことから、穀物でも米ではなく、「粟」「麦」「豆」の神が祭られ、植林して山を造る「山林」の神、そして、干ばつや水不足を恐れるということから、雨乞いをして豊作を祈る「雨」の神が祭られているであろう。

なお、竹富島には「ニールン神」という、竹富島に種子をもたらした神の話が残っている⁽⁴⁰⁾。旧暦八月八日には、島の西海岸の中ほどにある「ニールン石」と呼ばれる石の前に、「世迎え」という、ニールン神から種子物をいただいて、竹富島の豊作を祈る行事が行われる⁽⁴¹⁾。また、現在、国の重要無形民俗文化財に指定されている種子取祭は竹富島最大の行事であるが、内容としては「種蒔き」の行事である。狩俣恵一によると、この祭りを「種子取り」と呼ぶのは「保管してあった種子を取り出す」ことが重要であったからである⁽⁴²⁾。また、岡部伊都子は、種子取

祭において「収穫」は「次の年蒔く種子を取ることを意味し、それは「良きことはその次の良きことの種子」「よろこびは次のよろこびを生む力」、そして「一粒の力、やがて千万粒に」という意味であり、「すべてのよろこびを含む言葉」であるとして⁽⁴³⁾いる。「世迎え」にせよ「種子取祭」にせよ、やはり農業に関わる祭祀であり、それは、御嶽とともに、島民の生活と密接に結びついている。そこには島に生きる人々の思いや願いが反映しているのである。

4. 八重山研究を支えた人々

本章では、八重山研究を支えた人物として、石垣島では岩崎卓爾、竹富島では上勢頭亨を取り上げる。

(1) 岩崎卓爾

岩崎卓爾は、一八六九年、宮城県仙台市に生まれた。一八九八年に中央気象台附属石垣島測候所勤務を命ぜられて石垣島に赴任し、以後、四〇年の長きにわたって気象観測を行った⁽⁴⁴⁾。一九三三年四月には測候所の敷地内に岩崎の胸像が建立されたが、その台座には次のように記されている⁽⁴⁵⁾。

前石垣島測候所長正七位勲六等岩崎卓爾君明治二十年十月十七日仙台ニ生ル明治三十一年十月本島測候所ニ拜命創業ノ氣象事業に当リ万難ヲ排シ犠牲ヲ払ヒ献身氣象観測ニ從ヒ天変地異ニ島民ヲ安ゼシメ余暇研究ト著述ハ学界ノ重鎮トセラ

レ精進三十有五年今昭和七年二月依願退官茲ニ有志相謀リ君の胸像ヲ建立シ以テ其功績ヲ伝ヘントス

岩崎は、石垣島では「天文屋の御主前」として島民から慕われ、定年退職後も気象台の嘱託職員として島に残り、一九三七年、同島にて六八歳でその生涯を閉じた。

公私にわたって岩崎と交流が深かった瀬名波長宣は、岩崎が気象事業だけではなく「あらゆる方面に深い趣味と造詣を持たれ、博学具現の士たるの名に背かなかつた。島の民情風俗伝習とかいうものは常に島の古老達と膝を交へて検討し、島民以上に通曉⁽⁴⁶⁾していたと記している。その成果が後に『ひるぎの言葉』『やえまカブヤー』『石垣島気候篇』といった著書や、諸雑誌に発表した数多くの文章である。中には『八重山島由来記』などの史書や文書資料を全写したものもあり、いずれも八重山研究には欠かすことのできない第一級の資料である。

ここで岩崎の主要著作について概観しておこう。

『ひるぎの言葉』は、それまでに刊行されていた『石垣島案内記』と『八重山童謡集』に「与那国島ト波照間島及ビ尖閣列島」「暴風雨記事」を加えてまとめられたものであるが、その中の『石垣島案内記』には石垣島の自然地理だけではなく御嶽の由来や祭祀、伝説など多岐にわたる内容が収録されている。御嶽の由来では、美崎御嶽が先述の「オヤケアカハチの乱」をきっかけに創建されたという由来をはじめ、その他の御嶽や臨濟宗妙心寺派の桃林寺の創建由来などが記されている。祭祀で

は、今日、島民以外では見ることができない「アカマタ・クロマタ」という、旧暦六月に行われる豊年祭に出現する仮面・仮装の来訪神についての考察や「雨乞ひ祭」の歌詞の紹介、伝説では、「オナチラ」と「カナハチ」という名の二人の巨人伝説や、先述の「野底マーペー」にまつわる伝説などが収録されている。

『やえまカブヤー』は、一九二三年二月に岩崎が実施した子ども風の風揚げ大会に関する著作である。そこには「風」の構造が図入りで説明され、「風」の石垣島各地区の異名などが記されており、さらに風揚げに「どんな風を利用するか」とか当日の天気概況など岩崎ならではの記述もある。

『石垣島気候篇』は気象に関する文章を集めたものである。例えば、「各月の気候状態」という文章には各月における気象情報が記されている。岩崎が「島の名物」と呼ぶ「颱風」についてみると、颱風の季節が六月に始まって八月に発生頻度が最大になり、一二月を迎えて終期となるといったことなどが記されている。また、岩崎は、文中に「往昔諸葛孔明が七星壇に風を祈りしと言ふ『孔明南』は時恰も陰暦の正月前に当り」であるとか、「龍巻を方言『イノノカジ』と言ふ。『イノノ』とは激烈なる旋風（ツジカゼ・マジカゼ）即ち、海龍『イン、リョウ』と云ふ言葉の転約せしものと思惟される」、あるいは「俚諺に寒露の颱風は地底に吹き通すとあり」といったように、気象状態を単に自然現象としてのみ記述するのではなく、そこかしこに方言名やその由来あるいは俚諺などを盛り込み、気象を文化

や生活のなかにおいて記述している。この点もまた岩崎ならではのものである。

なお、諸雑誌に発表したものとしては「石垣島蝶相」「白蟻に関する通信」といった昆虫に関するものや「石垣島の龍巻」「八重山島の降雹」など珍しい気象現象についてまとめたものもある。それらにも方言名やその由来などが記されていることは、他の文章と同じである。

このように、岩崎が四〇年以上にわたる石垣島での生活と調査を通して集めた多岐にわたる情報はそれぞれが第一級のものであった。こうした岩崎が先鞭をつけた八重山研究を引き継いだのが喜舎場永珣である。喜舎場は後に『八重山民謡誌』『八重山民俗誌』『八重山歴史』などを著し「八重山研究の父」と呼ばれることになる。さらに、八重山方言を研究した宮良當壯、郷土史家で「明和の大津波」や「津波石」を研究した牧野清などが現れ、八重山研究を発展させていくのである。

(2) 上勢頭亨

上勢頭亨は、一九一〇年、竹富島に生まれた。一九二五年、竹富尋常小学校を卒業したが、在学中から島の古老たちを訪ねて島の民話や伝説、歌謡などを収集した⁽⁴⁾。また、古銭をきっかけに古物集めを始めたのもこの頃である。一九三三年、浄土真宗西本願寺住職の深遠法師との出会いにより仏門入りを決意し、一九三六年に許された。そして、一九四九年には竹富島の自宅を布教所として喜宝院を開設したが、同院は日本最南端の

寺院である。また、喜宝院には蒐集館を併設し、それまで上勢頭が集めた四〇〇〇点以上の民俗資料を展示している。

上勢頭自身が記すところによると、上勢頭は「十二歳の頃より島の古老や島の生き神様として尊敬されていた内盛クヤマ姥の長女仲盛マイツ姥（当時九十八歳）、さらに神司等より祭事祝詞（神口）を、島の産業恩人大豆翁頌徳碑に刻まれた前我名釜多翁からは風俗、俗信、伝説、民話を、明治の有名な舞踊の師匠である玉城クヤマ翁からは古典舞踊と謡を伝授され、大正になつて竹富島初代村長上間広起氏より島の行政・文化史を再録、その他諸先輩よりの御教示を戴き、特に八重山の歴史家であられる故喜舎場永珣先生とは長きにわたる交流をたもつ」ことができた。また、阿佐伊孫良によると、上勢頭は「大変に器用な人で、『書』を書き、三線や舞踊の師匠として民俗芸能に長じ、僧侶でありながら神職まで相務めた」という。⁴⁹まさに上勢頭は竹富島の文化を一身に体現した人物であることがわかる。

上勢頭は、後に、外間守善との出会いにより、それまで収集してきた民話や伝説、歌謡をまとめて『竹富島誌』（民話・民俗篇）と「歌謡・芸能篇」を出版する。当時、南島古謡の収集を行っていた外間は喜舎場永珣を通じて上勢頭を知る。⁵⁰外間は上勢頭がまとめた民話や歌謡に関する膨大な冊数のノート資料に驚き、その出版を勧めたのであった。なお、上勢頭は、与那国善三とともに『西塘伝』も著しており、このようにみても、竹富島の歴史や文化の研究に上勢頭亨の名は欠くことので

きないものとなっているのである。

ここで上勢頭の主要著作である『竹富島誌』について概観しておこう。先述のとおり、『竹富島誌』は「民話・民俗篇」と「歌謡・芸能篇」に分かれる。

まず「民話・民俗篇」である。本書では竹富島という名称の由来から説き起こし、本稿の冒頭に紹介した「島つくりの話」や、先述した「六西長の土地と海の配分の伝説」や「ニーラン神の話」などの民話や伝説を紹介している。上勢頭はその中の「根原金殿と与那国島の伝説」から「竹富島の鍛冶伝承」と題する論考をまとめたが、西塘についてその点から再評価を試みてもいることは先述のとおりである。また、これも先述した「世迎え」や「種子取祭」「西塘大祭」など竹富島の年中行事や風習、外間を驚愕させた「カンフチ（神口）」「ニガイフチ（願い口）」、その他、「言語」などが収録されている。

次に「歌謡・芸能篇」である。本篇では、古謡だけでも膨大な数の古謡が「アユー」「ジラバ」「ユンタ」「ユングトゥ」「その他」に分類されて収録され、その他にも「安里屋節」や西塘の作とされる「しきた盆節」、あるいは別名を「竹富節」とも言われる「真栄節」などの節歌が収録されている。さらに、童謡や狂言（例狂言と笑し狂言）、芸能（祭祀芸能や舞踊）、玩具・民芸品（藁算や島の特産品であるミンサー織など）が収録されているが、民具や民芸品については喜宝院蒐集館で実物を見ることができる。

なお、「真栄節」について少し触れておきたい。「真栄節」は

別名「竹富節」とも言われるが、この歌には、「野底マーペー」のところで触れた「ついでなら節」と同じように、「強制移住」にまつわる話が歌われている。上勢頭は、「野底マーペー」と同時期、主として蔡温が三司官の時代に、竹富島から石垣島に屋良部村（一七三六年、移住者は男女七四名）、安良村（一七五三年、男女二〇名）、盛山村（一七七一年、男女五三名）の三回、西表島に仲間村（一七三七年、人数は不明）の一回、強制移住が行われたことを記している。⁽⁵¹⁾ 真栄節の由来に関する伝承として、上勢頭は次のような話を収録している。⁽⁵²⁾ なお、真栄とは竹富島波座間村に生まれ、小山家の祖となった人物である。

崇禎十年（一六三七年）、八重山租税制度の穀人頭税が実施され、男生産人一名に対し粟五俵を割り当てられた。この人頭税は真栄の時代にもつづいていた。真栄は唯一筆の島なので収穫が少なく、また石原の多い島だったので、税を納めることが困難だった。そこで真栄は計画を立て、どのように竹富島で働いても苦勞を重ねるばかりだと思い、妻子を残して、将来性の乏しい竹富島を離れ、海上四里余の西表島仲間に渡った。そこで大原田の内の港口という所を開拓し稲作に従事した。けれども真栄は妻子を思う念が深く、その心情を謡った。この歌が真栄節である。

真栄は西表島仲間に移住しているので、この真栄節は一七三七年の西表島への移住にまつわるものであろう。真栄節には、

ついでなら節と同様に、愛する者と引き裂かれた悲しみが歌われているのである。

おわりに

以上、八重山諸島の歴史と文化について、石垣島と竹富島に焦点をあててまとめた。

言うまでもなく、本稿で取り上げたのはそのほんの一部であり、石垣島と竹富島以外の八重山諸島の島々を含めると、さらに多様な八重山世界を知ることができるであろう。そこには、島ごとに独自の歴史や文化があり、それらを個別に研究することが重要である一方で、「ついでなら節」と「真栄節」に見られるように八重山諸島の島々が共通の歴史や文化を有していることもあるのであり、そうした共通性を探ることもまた八重山研究には重要である。そして、それらを縦糸とし横糸とすることで八重山諸島の歴史と文化をより一層発展させていくことが求められるのである。

註

(1) 上勢頭亨、『竹富島誌 民話・民俗篇』、法政大学出版社、一九七六年（以下、「民話・民俗篇」と略す）、六一―七頁。

(2) 八重山諸島の地理については、次の文献を参照。安里進、高良倉吉、田名真之他編、『沖縄県の歴史』、山川出版社、二〇〇四年、四―七頁。波照間永吉、『八重山―風土と歴史そして祭祀習俗―』、網野善彦、大隈和雄、小沢昭一他編、『列島の神々…

竹富島の種子取祭 上川地方のイヨマンテ」、平凡社、一九九二年、所収、三六一―六八頁。竹富島については、地理だけでなく歴史や祭祀、民話、伝説などを含めて、竹富町史編集委員会編、『竹富町史』第二巻、二〇一―二〇一年を参照。

なお、八重山諸島における有人島と無人島については、石垣市役所観光課に確認した。

- (3) 球陽研究会編、『球陽 読み下し編』、角川書店、一九七四年、一〇八頁。

- (4) 『球陽』には英祖王統四代目の玉城王の即位元年(二二二四年)に沖繩本島が山南、山北、中山の三つに分かれたことが記されている。『球陽』、一〇三頁。

- (5) 察度とその即位については、『球陽』、一〇三―一〇五頁。

- (6) 明の洪武帝は楊載を使者として派遣し、入貢を促した。察度は弟の泰期を明に派遣し明に入貢した。『球陽』、一〇五頁。

- (7) 『球陽』、一四七頁。

- (8) 『球陽』では「遠弥計赤蜂保武川」は一人として記されているが、『八重山島由来記』には「オヤケアカハチ」と「ホンガワラ」の二人であると記されており、この点、意見が分かれる。宮城信勇はこれまでの説を整理しながら、別人としての「ホンガワラ」に関する伝説はなく、方言という点からは「ホンガワラ」が「オヤケアカハチ」が拠点とした石垣島の「大浜の頭分、頭職」を意味するとして「一人説」を主張している。宮城

信勇、「オヤケ・アカハチ、ホンガワラは同一人の呼称」、八重山文化研究会、『八重山文化論集』第二号、一九八〇年、所収、一一三―一二六頁。

- (9) この頃の八重山諸島における群雄割拠については、オヤケアカハチの乱を含めて、次の文献を参照。外間守善、『沖繩の歴史

と文化』、中公新書、一九九七年、二二八―二三一頁。大城立裕、「八重山の英傑たち―中山への抵抗と服属―」、『琉球の英傑たち』、プレジデント社、一九九二年、一四五―一六一頁。

(10) 岩崎卓爾、『岩崎卓爾全集』、伝統と現代社、一九七四年、一八頁(以下、『全集』と略す)。なお、同ヶ所では、「オヤケ、アカハチ」と「ボンガワラ」の二人とある。

アカハチの評価については、次の文献がよくまとまっている。三木健、『近代八重山におけるアカハチ観の形成―英雄と逆賊からの超克―』、『八重山近代史の諸相』、文嶺社、一九九二年、一一五―一三四頁。

- (11) 『球陽』、一四七頁。

- (12) 崎山直、「オヤケ・アカハチ―その虚像と実像―」、『青い海』春季号、一九七五年、所収、九六頁。

(13) 『球陽』、一四七―一四九頁。なお、平久保地域に勢力を張っていた平久保加那按司については、『慶来慶田城由来記』によると、アカハチの乱以前に、慶来慶田城用緒によって殺害されたことが記されている。この件については、「慶来慶田城由来記」、『石垣市史叢書1』、石垣市役所総務部市史編集室編、一九九一年、二―三頁。

- (14) 『全集』、二三頁。

- (15) 『球陽』、一四七頁。

- (16) 同前、一四八頁。

(17) 『全集』、二六頁。アカハチが残した「足跡」については、三木健が、次のような話を記している。「アカハチの本拠地といわれた大浜村の海岸には熔岩を流したような平らな岩があり、その石の上には、人の足の数倍もあるような足跡(?)が点々としるされてあった。子どもたちは誰言うともなく『これはオヤケ

- アカハチの足跡だそうだ」と言い合って目を見張った。」(三木健、前掲論文)、「近代八重山におけるアカハチ観の形成」、一一五頁。
- (18) 『球陽』、一四八頁。
- (19) 同前。
- (20) 同前、一四九―一五〇頁。
- (21) 同前、一五八頁。なお、西塘については、次の文献を参照。上勢頭亨、与那国善三編、『西塘伝』、沖縄西塘会、一九五七年。西里喜行、「西塘考」、『琉球大学教育学部紀要』第三二集、一九八八年、九九―一〇六頁。『星砂の島』六号、瑞木書房、二〇〇二年。なお、同号は西塘の特集号である。
- (22) 西里は西塘が捕虜であったとしている。西里、前掲論文、一〇二―一〇三頁。
- (23) 『球陽』、一五八頁。
- (24) 同前、一四九頁。
- (25) 同前。仲宗根の長男である中屋金盛豊見親の「悪政」については、『宮古島旧記』の「仲屋金盛豊見親譏を信じて仁人を害せし事」の項で記されている。中屋金盛豊見親が、部下の「仲屋勢頭」という「佞人」の讒言を信じて城辺の金志川豊見親を野原岳にて殺害した事件、いわゆる「野原岳の変」のことを指す(稲村賢敷編、『宮古島旧記 上巻』、一九五三年、五四―五七頁)。「忠導氏系図家譜正統」には、中屋金盛豊見親は「就不届不継家督」とあり、このことにより家督を継がなかったことがわかる(『忠導氏系図家譜正統』、『平良市史 第3巻 資料編 1 前近代』、平良市史編さん委員会編、一九八一年、所収、三三七頁)。
- (26) 同前、一五八頁。
- (27) 同前、一五八―一五九頁。
- (28) 上勢頭亨、「竹富島の鍛冶伝承」、『沖縄文化研究』九、法政大学沖縄文化研究所、一九八二年、九三頁。この点については、作家の司馬遼太郎も『街道をゆく6 沖縄・先島への道』(二〇〇八年、朝日新聞出版、二二―二三〇頁)の中で触れている。
- (29) 同前、九四頁。
- (30) 狩俣恵一、「沖縄・竹富島の種子取祭の伝承」、宮城学院女子大学、『沖縄研究ノート』一〇、二〇〇一年、所収、五頁。
- (31) 西塘大祭については、上勢頭、与那国編、前掲、三四―三五頁。
- (32) 高木健、「石化伝説―野底マーベーに見る世界」、八重山文化研究会編、前掲、所収、二二―二九頁。
- (33) 『球陽』、三〇二頁。
- (34) 喜舎場永珣、「野底マーベーとチンダラ節―男を慕って石と化す強制移民の哀話―」、『八重山民俗誌 下巻』、沖縄タイムス社、一九七七年、一七八―一七九頁。
- (35) 牧野清、「野底村」、石垣繁編、『石垣島白保村以北の旧村々―牧野清生誕百年記念論集―』、八重山文化研究会、二〇一一年、一六四頁。
- (36) 喜舎場、前掲論文、一七八頁。
- (37) 高木、前掲論文、二四五―二四六頁。
- (38) 上勢頭、前掲『民話・民俗篇』、x x頁。
- (39) 同前、三七―三九。
- (40) 同前、三一―三五頁。
- (41) 同前。
- (42) 狩俣、前掲論文、九頁。
- (43) 岡部伊都子、「竹富島・祭事」、網野、大隈、小沢他編、前掲

書、所収、八九頁。

(44) 岩崎卓爾については、次の文献を参照。岩崎、前掲、『全集』。

谷川健一、「岩崎卓爾・無名の前衛」、『沖繩・辺境の時間と空間』、三二書房、一九七〇年、二五八―二六六頁。三木健、「天文屋の先学者 岩崎卓爾」、『八重山研究の人々』、ニライ社、一九八九年、九―四〇頁。大城立裕、「風の御主前―小説・岩崎卓爾伝」、『大城立裕全集』第七卷、三一―一五三頁。

(45) 喜舎場永珣、前掲書、三一―八頁。

(46) 瀬名波長宣、「岩崎卓爾翁のことども」、『全集』所収、四二―七頁。

(47) 上勢頭亨については、次の文献を参照。上勢頭同子、「父の思い出―教えを仰いだ人たち」、『沖繩文化―沖繩文化協会創設四〇周年記念誌―』、『沖繩文化』編集所編、ロマン書房、一九八九年、所収、七七―五―七八〇頁。阿佐伊孫良、「竹富島喜宝院蒐集館文書と上勢頭亨」、竹富町史編集委員会編、『竹富町史 第一〇巻資料編 近代二』、所収、一〇―一八頁。外間守善、「上勢頭亨さんと竹富島」、『沖繩学への道』、岩波書店、二〇〇二年、所収、三〇七―三一―一頁。

(48) 上勢頭、前掲『民話・民俗篇』、x i 頁。

(49) 阿佐伊孫良、前掲論文、一七頁。司馬遼太郎は、竹富島に上勢頭を訪ねた時のことを前掲『街道をゆく』中で次のように記している（一四八頁）。

上勢頭さんは大きな下駄を鳴らして、陳列品のあちこちをまわっては、説明してくれた。金属製の道具はまったくといっていいほどなく、ワラ製か木製か竹製ばかりだった。竹製の道具のなかで簡単な打楽器があった。

「これは何ですか」

ときくと、上勢頭さんは説明するのがもどかしかつたのかつま

みあげて演奏しはじめた。唄も入った。同時に、体が自然におどりはじめた。芸能というものがいかに人間を美しくみせるためのものかということであらためて悟ったほど、この小さな老人の姿が美しく見えた。

(50) 外間、前掲論文。

(51) 上勢頭亨、『竹富島誌 歌謡・芸能篇』、法政大学出版社、一九七九年、四〇八―四一三頁。

(52) 上勢頭、前掲『民話・民俗篇』、一一―三頁。